

# 幸せを売る食堂

## コミレス・食茶房 余市テラス（余市町）

「今日は。お元気でしたか」。「いらっしやい。元気でしたよ。」玄関を開けたとたん、明るく元気な会話がぽんぽん弾む。「お昼をいただくわ」「ハイ、ランチー丁」。出てきたランチはついさっきまで畑にあった野菜や海にいた魚介類をふんだんに使った新鮮で、色あざやかな一品。食欲をそそられてぱくついている間も、客同士や経営者夫婦との交流がにぎやかに続き、店内を静かに包むBGMと相まって、満たされた時間がゆったり流れてゆく。

ここは後志管内余市町のコミュニティ・レストラン（略してコミレス）「食茶房 B & B 余市テラス」食を中心に、みんなの交流の中から地域課題を解決してゆこうと開かれた拠点だ。といっても堅苦しいことは一つもなく、いつでも誰でも、心持ちよくむかえ入れてくれる地域食堂といったおもむき。シャンソン歌手・故芦野宏さんの持歌『幸せを売る男』という歌詞の中に「心に歌を投げかけ歩く、私どもの商売は幸せを売る商売……」という一節がある。その言葉を借りれば「コミレス」はさしずめ「幸せを売るお店」ということになるだろうか。



伊藤オーナー夫妻と談笑しながら、充実した食事の時間を過ごす三世代家族

### ■ コミレスとの出会い

コミレスとは、「食」を中核にコミュニティ支援を目的としたNPOの起業モデルをいう。東京都国分寺市にある特定非営利活動法人NPO研修・情報センター（代表・世古一穂氏）が推進するまちづくり運動の一環だ。「余市テラス」は、現在道内各地で展開するコミレスの草分け的存在であると同時に、コミュニティ・レストランネットワーク北海道の事務局も兼ねている。オーナーでネットワーク北海道の代表を務めるのは伊藤規久子さん（55）。店は夫の真人さん（63）と二人で支え、ほかに二人のスタッフがお手伝いしている。

規久子さんがコミレスにかかわるようになったのは、今から8年ほど前。札幌市に住んでいて同市が開いた市民活動促進検討委員会の公募委員になった時。そこで「市民参加」や「協働」という言葉に出会い、それまでは当然と思っていたトップダウン型とは異なる住民合意形成があることを知ったことから。その後、東京のNPO中間支援組織のNPO研修情報センターで行っていた人材養成講座に参加し、新しいリーダー像と仕事を通じて身近で地域支援のできる生き方を学んだ。高齢者の孤独死、若い母親の子育て、食の安全、身障者対応、ひきこもり児童・生徒など山積する地域、社会問題を解決するために、自ら具体的、直接的に実行できる方策—それが「コミレス」だった。

帰札すると早速、それまで長く地域で共同購入活動などをしてきた生活クラブ生活協同組合の仲間に内容を披露。賛同者が続々と集まり、場所を提供してくれる人も現れた。

そこで、雇い、雇われるという人間関係ではなく、働く者同士が共同で出資、経営、労働を担う「ワーカーズ・コレクティブ」という形式のコミレス「野の花」を、15人の共同出資で札幌市豊平区に開店した。スペースは小さなレストランの半分程度、椅子や食器などの備品はメンバーが持ち寄り、内装はそれぞれの夫や知人有志が手伝ってくれた。2003年6月のことだった。

## ■ 共同出資経営から個人オーナーへ

「野の花」は、地域の農家との提携や生協などの協力で「コミレス」の主テーマである「安全安心の食の提供」を実現したほか、やはり起業目的に掲げられた高齢者への会食の場づくり、母親に対する育児支援、子供の健全育成、人々の交流の場づくりなどさまざまな地域課題の解決に尽力し、今も地域にとって大切な場所として定着している。



お店は安心安全な食事と、情報交流を求めて訪れる客でいつもにぎやか

この間規久子さんは、共同出資経営者の立場で、またこのレストラン開店の言い出しっぺとして中心となって活躍してきた。同時に、いずれ自分がオーナーとなる新店の開店を模索していた。短大の准教授だった夫、眞人さんが間もなく定年を迎え、自分の夢を実現する場を求めていたこと、余市に高齢の両親が住んでいること、海や山に囲まれて新鮮な食材に恵まれていることなどを考えると、自分たちが余市に移り住んで「コミレス」を開くことが理想だった。お世話になっている郷里へのご恩返しと思

いもあった。こうして 2007 年 11 月、夫婦は長年住み慣れた札幌から現地へ転居し、翌年 2 月、コミレス「食茶房、B&B余市テラス」をオープンさせた。食茶房にしたのは、居酒屋をやりたいと思っていた眞人さんに「酒」ではなく、コーヒーやお茶を担当するマスターになってもらうため。B&Bは英語のベッド（宿泊）とブレックファースト（朝食）の意味で、食堂だけでは限界があるため 2 階に 4 室の宿泊スペースを設けたことから名付けた。



店内にはコミュニケーション拠点にふさわしく、いろんなグッズや催し物の案内など情報交換の一角も

### ■ 経営は軌道へ 本格始動はこれから

それから 3 年。「余市テラス」は開店の狙いや、新鮮で健康的な食事メニューが知られるにつれ徐々に客足が増え、今では一日一回顔を出さなくてはならないという常連客をはじめ、何度も足を運ぶリピーター、口コミやインターネットで知ったという札幌や道内外の旅行者の利用が着実に増えつつある。7 月のある一日。親、子、孫の三世代で昼食に訪れていた地元余市町の牧野

則雄さん（68）夫婦は「ここのランチとコーヒーが絶品でね。伊藤さん夫婦との話も楽しいし、見知らぬ客同士が、いろんな会話を通じてすぐ友達になれるのもすばらしい。週 2 回は来ますよ」と、定年後の充実のひとときを話す。また、札幌から来たという若い女性の二人連れは「野菜中心のみずみずしいランチがとってもおいしかった。芸術や文化、ファッション、生き方などいろんな人と、いろんな情報が交換できて素敵なお店」と満足の表現。店の一角には取れたて野菜をはじめ地元の人が手づくりしたジャム、ジュース、焼き物、布小物などに加え、ジャズライブや各種公演、講演会の開催パンフ、自然探求やエコツーリズムなどの案内チラシが所狭しと並べられ、訪れた人々の興味を掘り起こす工夫も。コミレスの狙いの一つである「人々のコミュニケーションの場提供」が確実に実現されている。

規久子さんによると現在道内で開店しているコミレスは 25。それぞれの地域課題が異なるので、取り組むテーマも高齢者と児童との交流、身障者サポート、育児・子育て支援、人材育成などさまざまだが、共通して安全・安心の食を供し、人々の交流でまちづくりの中心的な役割を果たしているのは確か。規久さんはそのネットワーク充実と拡大を目指して仕事の合間をぬって忙しく全道を駆けめぐる。「安全、安心の食を提供するとなると、どうしても食材費が割高になり、そこをどうするかが各経営者

の知恵の働かせどころ。儲けることが目的ではないので私を含め皆さん、ボランティア精神で頑張っています。支えてくれるリピーターの方々には心から感謝しています」と伊藤さん夫妻。将来については、ネットワークを利用して食材の共同購入や運営方法の研修などを考えているほか、未だ途中の、新たなビジネスの創設や、雇用促進のための仕事の場づくりなどを構想しているそう。「一人でも多くの人に来てもらい、食べ、話し合って豊かな人生を紡ぎあってもらえれば幸いです。お店はそのためにあるのですから」と夢を大きく膨らませている。



■ 連絡先

〒046-0003 余市郡余市町黒川町 10-3-27

コミレス「食茶房・余市テラス」

コミレスネットワーク北海道代表 伊藤 規久子

TEL/FAX 0135-48-6455

Email : yoichi-tera8@kkh.biglobe.ne.jp

営業時間：午前 11 時～午後 6 時

(定休日：水・木曜日)